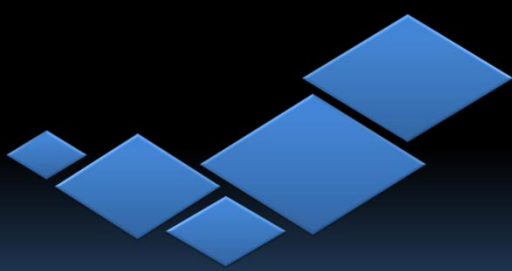




Title	月刊DRF 第43号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2013-08-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73594
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_43.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第43号

No. 43 Aug, 2013

【特集1】Open Repositories 2013

【特集2】MIS30参加レポート

その他の記事

新規参加機関紹介

【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常



Open Repositories 2013

ORは、リポジトリやオープンデータをテーマとした国際会議です。8目を迎える今年は7/8-7/12にカナダのプリンスエドワード島で開催されました。参加された山地先生、行木先生から、その様子をレポートしていただきました。

<http://or2013.net/>



山地 一禎

国立情報学研究所

学術ネットワーク研究開発センター

Open Repositories 2013は、カナダのプリンスエドワード島にある、シャーロットタウンで開催されました。赤毛のアンの物語の舞台となった島です。朝夕は少し肌寒いながらも過ごしやすい気候で、街中が花で彩られていました。中心地を少し離れると、穏やかな麦畑が一面に広がっており、物語の中で「世界でいちばん美しい島」と形容された理由がわかるような気がします。

今年のORも、初日からデータリポジトリの話題が中心でした。いくつかの主要な研究費助成機関等によるデータ公開の指針と並行して始まったこの話題も、年を追うごとに内容が成熟してきています。昨年度のORでは、「データを公開するのは機関リポジトリか主題別リポジトリか?」とか「メタデータセットはどうするか?」といった話題がみられました。今年はそうした試行錯誤の段階から、先行大学における実践的な事例紹介へと移っていました。米国のPurdueのような先進的な大学では、1. 研究者が外部資金獲得した情報を担当事務と図書館が共有し、2. そのプロジェクトに対して研究者間でデータ共有するためのインフラを提供し、3. データへの柔軟なアクセス制御からプロジェクト終了後には必要に応じて公開、というフローが確立され公開データも順調に増えています。外部資金申請における、データ公開ポリシーのサンプルを作るサービスなども立ち上がっています。

欧米では、こうした活動をEサイエンスあるいはデータライブラリアンがサポートしています。外部資金を獲得した研究代表者が所属する大学において、データ公開の起点となるリポジトリが運用されるケースが、今後も増えてくる印象を受けました。また、研究データ以外にも、教育資料などの多様なコンテンツに関する演題が並んでいました。その下支えをしているのがサブジェクトライブラリアンであるところが、日本人として講演を聞いていてジレンマを感じました。今年もORは、学会初日から大きなインパクトを私に与えました。来年度は、是非ともDRFな図書館の方々と一緒に参加したいと強く思いました。





行木 孝夫

北海道大学理学研究院

トロント空港の雷雨の影響で乗り継げなかった結果、初日はキャンセルする羽目になりました。二日目からの口頭発表から紹介します。305名が24国から参加しました。

The Digital Preservation Network: Architecture, Processes and Policies

Digital Preservation Network は2012年から開始。研究の各段階でのアーカイブを担う。成果とデータの保存を信頼できる形で実現することを目指し、単純なリポジトリへの投入から複製、リポジトリの継承などに対応する。「ダーク」なリポジトリが林立することによる危機を防ぎたい。アーキテクチャの特徴は分散リポジトリの制御を担うメッセージングモデルである。暗号化されたコンテンツにも対応する。

The Academic Preservation Trust consortial approach to preservation and services

The Academic Preservation Trust

(<http://aptrust.org/>)は12研究機関で構成するコンソーシアムであり、DPNのノードとして、コンテンツの保存を目的とする。多様なリポジトリへのアクセスを促進する。Fedora4をベースとしてコンテンツの投入を柔軟に実装している。共同モデルとしてガバナンスモデル、ファイナンスモデル、サービス開発のプライオリティを提供している。

Hosting your services in the cloud - Lessons DuraSpace has learned

クラウドベースのリポジトリサービスを運用した経験を共有する。情報サービスのサポートを受けられない中でリポジトリをホストするとして、クラウドが提供するもの、受けられるサービス等々は何かを整理する。

Understanding and Improving Research Data Management in the Visual Arts: Case Study of the KAPTUR Project

多様なデータが出現する中でデータを扱う意義は高い。このKAPTURプロジェクトでは、複数の機関が統合的に芸術研究に関するデータを扱う過程でコンテンツの収集、保存、再利用のケーススタディを目指している。

Sharing Data-Rich Research through Repository Layering

データキュレーションの必要性とライブラリーの役割。CDLの一部としてMerrittを構築。マイクロサービスの集合として構成。スケールの問題として、例えばファイル数は一オブジェクトが47000個、ファイルは14Gまで様々。ユーザに対してはタイムアウトを防ぐなどの対応が必要。研究のハブとして展開する。

How partnership accelerates Open Science: High-Energy-Physics and INSPIRE, a case study of a complex repository ecosystem.

高エネルギー物理におけるWWW版SPIRESは最初のウェブ上のデータベースであり、キラーアプリ(Tim Berners Lee)である。唯一の統合的な情報源で、信頼できるデータベース。著者ページとデータについて。著者同定、ORCIDとの連携。論文のサプリメントあるいは独立のデータ。DOIをつけることもできる。

(<http://inspirehep.net/record/849050>)

Developing the Repository Manager Community

リポジトリマネージャーのコミュニティ構築に関する報告。DRFにも触れていた。

RAD-UNAM: Genesis and evolution of a repository administrators group

ラテンアメリカのリポジトリの状況を報告。RAD-UNAMはデジタルコレクションのネットワーク。9リポジトリで構成。評価基準の提案が重要な活動。

以上、メインの会議はデータリポジトリを中心とする内容が主でしたが、ユーザグループではメタデータ再利用のワークフローを提案する発表など、地道な活動も見られました。機関リポジトリという存在、コンテンツとその扱いをもう一度考え直す時期かもしれません。写真は3セッションに分かれたうちの一会場の様子です。



新規
参加機関
紹介



明治大学学術成果リポジトリ
Meiji Repository

<http://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

2008年4月に正式公開以来、教員と図書館員で構成される機関リポジトリ運営委員会が主体となって運営しています。学内出版物(紀要)を中心に収集を続け、今年2013年5月に登録件数1万件を超えました。今後は、学位規則改正をよい契機として学内諸部署との連携を強め、さらに効率的で幅広いコンテンツの収集を目指したいと思います。今までDRFの皆さまには、様々な技術情報、メーリングリストのやりとり等を通してたくさんの情報を得て助けをいただけてきました。また励みにしてきました。今後はDRFに加えていただき、微力ではありますがお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願い致します。





7月6日から7日にかけて沖縄県立看護大学にてMIS30：医学情報サービス研究大会第30回沖縄大会が開催されました。

昨年の第29回築地大会では、DRFの主催で、「リポジトリで発信する医療情報・病院図書館との連携」と題し、病院図書館への機関リポジトリへの参画を呼び掛けるワークショップ（以下WS）を開催いたしました。

今回の大会では、MIS事務局の古謝久美子氏の呼びかけで「共同リポジトリの活用：情報発信を病院図書室と共に」と題し、共同リポジトリを主眼においた、病院図書館との連携に関するWSが開催されました。

その様子をレポートいたします。

<レポート：和田崇（DRF企画WG/奈良県立医科大学）>

第1部 事例報告

第1部では既存の構築館からの事例、現況報告がありました。

尾崎氏からは、オープンアクセスの基本的な解説から、共同リポジトリ先行構築館としての活動の経緯や、国内外の現況報告があり、渡辺氏、古謝氏からは、共同リポジトリに参加している立場から、他の参加館との連携についての事例や、スタッフのスキルアップの話題、また病院誌、看護研究誌の利用状況についての報告がありました。

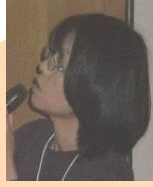
最後に和田から、現在共同リポジトリ化を進めている奈良医大機関リポジトリ「GINMU」の現況や病院誌、看護研究誌の必要性について、報告を行いました。



共同リポジトリの概要と現況
尾崎文代氏
(広島大学/司会兼務)



共同リポジトリ事例Ⅰ：
広島県大学共同リポジトリ
(HARP)参加機関より
渡辺さゆり氏
(日本赤十字広島看護大学)



共同リポジトリ事例Ⅱ：
沖縄地域学リポジトリ
(ORION)参加機関より
古謝久美子氏
(琉球大学/大会事務局)



医学情報と共同リポジトリ：
続・病院誌、看護研究誌の
必要性
和田崇
(奈良県立医科大学)

第2部 パネルディスカッション

第2部では沖縄協同病院図書室の濱元ゆかり氏が、病院図書館側の代表として加わった、パネルディスカッションが行われました。

その中で濱元氏からは、病院図書館はたとえ参加が容易な「共同リポジトリ」であっても、現在のように1人2人で活動している状態では、どうしても実務面での日常業務が優先され、リポジトリ業務を行うことは困難であり、また医師、看護師も所属病院が発行している病院誌、看護研究誌に需要がある事を自覚していないという意見が出されました。

これを受けて、先行機関としては、共同リポジトリのメリットを活かした病院図書館へのサポート体制の確立と、医師、看護師へむけて、機関リポジトリの説明会などを実施し、現在、医学情報の中で、病院誌、看護研究誌が大きなウェイトを占めているという現状を把握していただくことも重要であるとの結論に達しました。



濱元ゆかり氏
(沖縄協同病院図書室)

豊橋技術科学大学学術機関リポジトリ
Toyohashi University of Technology Academic Institutional Repository

<http://repo.lib.tut.ac.jp/>

2013年2月に正式公開しました。現在は、人文社会系紀要、博士論文を中心に登録公開しています。統計を確認する度に、海外からの利用に驚き、リポジトリの公開による世界へのアピール度合いを実感します。今後は、学術雑誌論文の登録にも力を入れていきたいと思っています。DRFに加えていただき、とても心強いです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。豊橋技術科学大学附属図書館

KWURepository
Kyoritsu Women's University & Junior College

共立女子大学リポジトリ

<http://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/>

DRF と JAIRO Cloud のおかげでリポジトリを立ち上げることができました。これからもよろしくお願いします。

新規参加機関紹介





佐藤 翔

CHORUS VS SHARE 米国パブリックアクセスをめぐる戦い

同志社大学社会学部教育文化学科 助教
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」
(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>) 管理人

政府助成研究のパブリックアクセス実現の方法をめぐる出版者と図書館の戦いが、米国で始まっています。

きっかけはホワイトハウス・科学技術政策局 (OSTP) が2013年2月に出した公的助成研究成果のパブリックアクセス拡大に関する指令でした。この指令では研究予算が年間1億ドル以上の政府機関に対し、2013年8月22日までにアクセス拡大のための方針を策定せよ、と義務付けています。これを受け、2013年6月に出版者陣営と図書館陣営のそれぞれから、パブリックアクセス実現のための提案が相次いで出されました。

このうちElsevierや米国心理学会等の商業出版者・学協会が提案しているのが” Clearing House for the Open Research of the United States”

(CHORUS) という仕組みです。これはCrossRefを通じてメタデータや助成金情報を出版者から収集し、APIを通じて助成研究の情報を集めたポータル・CHORUSを公開するという提案で、論文本文はエンバゴ期間を終えた後、各出版者のプラットフォームで公開し、利用者はCHORUSのサイト等からリンクを辿り各論文にアクセスすることになります。あくまでコンテンツは出版者が自前で持つモデルで、その目的は明らかにPubMed Central (PMC) への対抗です。PMC掲載論文は出版者プラットフォームでのアクセスが減るという調査もあり、アクセス減による購読打ち切り等、経営への影響を防ごうという意図が見えます。

一方、米国大学協会 (AAU) や北米研究図書館協会 (ARL) は” SHared Access Research Ecosystem” (SHARE) というモデルを提案しています。こちらは各大学・研究機関のリポジトリを通じてパブリックアクセスを実現しようというもので、学協会・出版者が直接、各機関リポジトリに論文を提供するか、著者が最終稿をリポジトリに登録し、登録後に各機関がその情報を助成機関に提供することを想定しています。コンテンツそのものをすべて各機関のリポジトリに集約しようというモデルで、実現すればコンテンツ収集に失敗していると言われる米国の機関リポジトリを、一気に前進させるかも知れません。

CHORUS、SHAREとも発表直後から関係者の間で話題になり、両者を対比する議論も様々に行われています。その中でもカーネギーメロン大学 Denise Troll Covey氏による考察に論点がよくまとめられています。それをさらに乱暴に一言に収めてしまえば、CHORUSは動機の面で信用ならないが、SHAREは能力の面で信用ならない、と言えそうです。出版者には自らの商売に不利になることはしそくないという懸念がある一方で、図書館、それも今まで必ずしもリポジトリへのコンテンツ収集に成功していない米国の大学・研究図書館に、SHAREのモデルを本当に実現できるのか、というのも疑問です。また、現在アメリカで最も成功しているPMCのようなセントラルリポジトリのモデルはCHORUSでもSHAREでも排除されており、この点がOSTPや政府機関からどう受け止められるかも気になります。

今後はCHORUSが受け入れられるのかSHAREが受け入れられていくのか、どちらでもなく異なる形でパブリックアクセスが進むのか。戦いの趨勢が見えてくるのは各機関のアクセス拡大方針が示される今夏以降になりそうです。

参考リンク:

- http://www.whitehouse.gov/sites/default/files/microsites/ostp/ostp_public_access_memo_2013.pdf
- <http://johokanri.jp/stiupdates/policy/2013/02/008251.html> <http://current.ndl.go.jp/node/22967>
- <http://scholarlykitchen.sspnet.org/2013/06/04/joining-a-chorus-publishers-offer-the-ostp-a-proactive-modern-and-cost-saving-public-access-solution/>
- <http://johokanri.jp/stiupdates/policy/2013/06/008597.html>
- <http://current.ndl.go.jp/node/23696>
- <http://www.arl.org/storage/documents/publications/share-proposal-07june13.pdf>
- <http://johokanri.jp/stiupdates/policy/2013/06/008613.html>
- <http://current.ndl.go.jp/node/23695>
- http://works.bepress.com/denise_troll_covey/72
- <http://dx.doi.org/10.1096/fj.13-229922>

次号
予告

【特集】ナマステー！！ IT大国インドの機関リポジトリは今！？ ほか



Facebook やってます！
<https://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>



月刊DRF 読者アンケート 受付中！
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

【編集後記】プリンスエドワード島、沖縄からのレポートはいかがだったでしょうか？

連載も回を追うごとにパワーアップすること間違いなし！ DRFに新しい仲間、続々です。(WAbMon)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第43号 平成25年8月1日発行 デジタルリポジトリ連合